



TITLE:

現代口語ビルマ語の名詞節標識-ta_・-hma_の用法・機能

AUTHOR(S):

澤田, 英夫

CITATION:

澤田, 英夫. 現代口語ビルマ語の名詞節標識-ta_・-hma_の用法・機能.
言語学研究 1992, 11: 25-61

ISSUE DATE:

1992-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87971>

RIGHT:

澤田 英夫

はじめに

現代ビルマ語には、動詞句の主要部となる述語に後接して節(clause)を形成し、その動詞句の表す事象が、話者によって現実に生起したものとして捉えられているかどうかを表す一連の節標識がある。以下の文に見られる-te_・-me_がその一例である。

(1) 動態述語(例: sa:-「食べる」)

txu_ we'txa: sa:^te_ || 彼は豚肉を食べた

彼 豚肉 食べる SM<現実>

txu_ we'txa: sa:-me_ || 彼は豚肉を食べるだろう

SM<非現実>

(2) 状態述語(例: hyi.-「いる」)

txu_ ein_-hma_ hyi.^te_ || 彼は家にいる;彼は家にいた

彼 家 LOC いる SM<現実>

txu_ ein_-hma_ hyi.-me_ || 彼は家にいるだろう

SM<非現実>

動態述語の場合、その表す動的な事象が生起するということは、その事象が開始し終了することを意味する。そしてこの場合、-te_は発話時点以前に事象が現実に開始・終了したことを表し、-me_はそうでないことを表す。一方、状態述語の場合には、その表す状態の生起は、その状態の開始を意味する。この場合、-te_は発話時点においてその状態がまだ成立しているか否かを問わず、それ以前に状態が現実に開始したことを表し、-me_はそうでないことを表す。-te_・-me_の示す対立は、認識論的法(epistemic mood)の対立の一種であると考えてよい。

これら一連の節標識は、それによって形成される節がどのような機能を果たすかによって使い分けられる。¹⁾

(3) 口語

(3') 文語

現実法 (Realis)	非現実法 (Irrealis)	現実法	非現実法
(a) -te_	-me_	(a') -txi_	-mi_
(b) -te.	-me.	(b') -txi.	-mi.
(c) -txa	-ma	(c') -txa	-ma
(d) -ta_	-hma_		

(b/b')は(a/a')が第3声調を伴ったもの、²⁾、(c/c')は(a/a')または(b/b')のいずれかが弱化して固有の声調を失ったもの、そして(d)は(c)が名詞 ha_「もの」と融合したものであると、それぞれ考えられる。(ただし、(c)の-txaは文語形に由来するものである。³⁾)

口語形と文語形を比べてすぐに気付くことは、口語形の(d)に対応する形式が文語形には存在しないということである。口語形の(d)の持つ機能の大部分は、文語では(a')の形式によって果たされる。逆に言えば、文語形の(a')の持つ機能が、口語形では(a)と(d)の2組の形態素によって分担されているのである。

(4)	文語	口語
	-txi_ · -mi_	$\left\{ \begin{array}{l} -te_ · -me_ \\ -ta_ · -hma_ \end{array} \right.$

ビルマ語は、文法的機能を担う助辞の形式に関して、口語と文語の間かなりの差異が見られる言語である。口語と文語で異なる形式を持つ助辞が同じ機能を果たしたり、また複数の文語形式が単一の口語形式に対応したりするといったことは珍しくない。しかしこの場合のように、複数の口語形式が単一の文語形式に対応するのは、比較的珍しいことである。

一般に、ある特定の機能を担う形式が口語にのみ見られ文語に見られない場合、その機能が発話の場における話し手～聞き手の相互作用のありかたにかかわりを持つということが考えられる。こうした要因が文語の場合に全く問題にならないわけではないけれども、一般に口語の場合の方が、こうした要因の重要性が高いのである。

本稿では、口語の(d)形式、すなわち名詞節標識-ta_ · -hma_ の用法の記述を行い、現代口語ビルマ語の-te_ · -me_と-ta_ · -hma_による機能分担において、有標とみなし得る-ta_ · -hma_の担う機能の多くに、前提(presupposition)の概念がかかわりを持っていることを示したい。

1 導入

1.1 ビルマ語の節の構造

まず最初に、ビルマ語の節の構造について概観しておく。

本稿では、以下のような基本構造を持つ形式的単位を「節」と名付ける。

(5)	CMPL*	PRED-CLM
ex.	txu_ moun.hin:ga:	sa:^te_

彼 モヒンガー 食べる SM 彼はモヒンガーを食べた。

上の図式で、CMPLは補語を、PREDは述語を、そしてCLMは節標識を表す。*は複数

個の生起を許すことを示す。

述語のうちで最も簡単なのは、動詞1つで述語となる場合である。⁴⁾ 動詞を修飾する助辞(動詞修飾素:VMD)が動詞に後続することがある。動詞修飾素は複数個生起してもよい。否定は接頭辞(NEG)ma-によって表される。⁵⁾

(6) PRED → (NEG-)V(- VMD*)-

ex. ma- sa: ^sei_ ^chin_- 食べさせたくな(い)
食べる <使役> <願望>

補語は述語の表す意味を補足する要素である。補語として用いられる名詞句は、意味役割・文法役割を表す助辞(格標識:CM)や名詞(特殊補語名詞:SCN)を伴う。さらにその後、主として談話的な役割を担うと考えられる助辞(補語修飾素:CMD)が付加されることもある。

(7) NPCMPL → NP-CM(-CMD*) / NP -SCN (-CMD*)

ex. shan_-ø -le: ⁶⁾ txu.-atwe' -to.
米 SUBJ も 彼のために は

述語と補語が結び付いてできた単位を動詞句(VP)と呼ぶ。

節標識は、節の果たす機能——独立文・名詞修飾節・名詞節・副詞的従属節など——を表すものである。(3)に挙げたものの他に、-lou. <理由>「…から」・-yin_ <仮定>「…たら」・-aun_ <目的>「…ように」などのように、認識論的法の対立に関わらない節標識がある。これらはみな随意的な副詞的従属節を形成するものである。これらを従属節標識(Subordinate Clause Marker)と名付ける。名詞節や副詞的従属節は、より上位の節の中で補語として機能する。

節標識、とりわけ独立文を表す標識の前後に、丁寧・疑問・確言・念押しなどの発話行為的な機能を表したり、認識論的法の意味に一定の修飾を加えたりする助辞(文修飾素:SMD)が置かれることもある。

(8) CLAUSE → VP(- SMD*)-CLM(-SMD*)

ex. txu_ moun.hin:ga: sa: ^pa_ ^txa -la: ||
彼 モヒンガー 食べる <丁寧> SM <疑問>
彼はモヒンガーを食べますか?

1.2 -ta_・-hma_ 以外の法の対立を示す節標識の機能

前に述べたように、節標識はそれによって形成される節が他の要素に対してどのような機能を果たすかを示すものである。

-ta_・-hma_ の機能、あるいは、-ta_・-hma_ によって形成される節の機能について考える前に、(3)に示した節標識のうち-ta_・-hma_ 以外のものについて、ここ

で概観しておきたい。

1.2.1 -te_・-me_

-te_・-me_は、独立文の文末に通常現れる形式である。

(9)a. amei_ thamin: che'-te_|| 母が御飯を炊いた。

母 御飯 炊く SM

b. amei_ thamin: che'-me_|| 母が御飯を炊くだろう。

SM

動詞に否定辞ma- が前接される場合には、-te_・-me_のかわりに-phu: が現れる。つまり、-te_・-me_によって示される法の対立は、否定の場合には中和されてしまうのである。

(10) amei_ thamin: ma-che'-phu: || 母は御飯を炊かなかった／

NEG SM 炊かないだろう。

-te_・-me_が独立文の文末にのみ現れるわけではない。以下の例では、埋め込まれた節の中に-te_・-me_が現れている。

(11)a. amei_ thamin: che'-te_-lou. txu_ pyo:^te_||

SM QUT 彼 話す SM

母が御飯を炊いたと彼は言った。

b. amei_ thamin: che'-me_ thin^te_|| 母が御飯を炊くだろうと思った。

SM 思う SM

この場合でも-te_・-me_によって導かれる節は、主語によってなされた一まとまりの発話・思考内容を表している。ゆえに、これらも独立文に準じて考えることができよう。-te_・-me_を文標識(Sentence Marker)と名付ける。

1.2.2 -te_・-me_

-te_・-me_の主要な職能は、名詞修飾節(attributive clause)の形成である。

(12)a. amei_ thamin: che'-te_/me_

b. [_ thamin: che'-te.] lu_| 御飯を炊いた人

ACM 人

c. [_ thamin: ma-che'-me.] lu_| 御飯を炊かないであろう人

d. [amei_ _ che'-te.] thamin:| 母が炊いた御飯

e. [amei_ _ che'-me.] thamin:| 母が炊くであろう御飯

これらの例から明らかなように、ビルマ語の関係節内では、被修飾名詞に対応する関係代名詞のような要素は表れない。節内のある要素がギャップとなり、被修飾名詞はそのギャップに関係付けられる。それゆえ、ビルマ語の関係節は、Comrie

(1981)の分類の中のgap typeに属すると言うことができる。

上例は被修飾名詞が関係節内の述語の項に関係付けられる例であるが、被修飾名詞を関係付けることのできる要素は項だけではない。以下の文は、被修飾名詞が関係節内の述語の項でない随意的な補語に関係付けられる例である。

(13)a. [amei_ thamin: che'-te.] nei_ya_(-hma_) |

ACM 場所 LOC

母が御飯を炊いた場所(で)

cf. e:di_-nei_ya_-hma_ amei_ thamin: che'-te_ ||

その場所で母は御飯を炊いた。

b. [amei_ thamin: che'-te.] akha_ | 母が御飯を炊いたとき

ACM とき

cf. e:di_-akha_ amei_ thamin: che'-te_ || そのとき母は御飯を炊いた。

c. [amei_ thamin: che'-te.] ni:(-ne.) | 母が御飯を炊いた方法(で)

ACM 方法 INST

cf. e:di_-ni:-ne. amei_ thamin: che'-te_ ||

その方法で母は御飯を炊いた。

また、-te.・-me.は関係節の他に同格節(appositional clause)を形成するためにも用いられる。

(14)a. [amei_ thamin: ma-che'-te.] acaun: | 母が御飯を炊かなかったこと

ACM こと

b. [thamin: che'-me.] dxabo: | 母が御飯を炊こうという気持ち

ACM 気持ち

c. [nei.^tain: thamin: che'-ya.-me.] ba_wa. |

日 毎…

<不可避> ACM 境遇

毎日御飯を炊かなければならない境遇

さらに、以下の例では、-te.・-me.が特殊補語名詞を修飾するために用いられている。⁷⁾

(15)a. amei_ thamin: che'-te./me. asa: | 母が御飯を炊くかわりに

ACM かわり

b. amei_ thamin: che'-te. atain: | 母が御飯を炊いたとおりに
とおりに

c. amei_ thamin: che'-te./me. atwe' | 母が御飯を炊くために
ために

d. amei_ thamin: ma-che'-te. apyin_ | 母が御飯を炊かないだけでなく
ほか

(12c)(14a)(15d) から明らかなように、否定の動詞を用いた場合にも、-te.・-me. には-te_・-me_に見られるような法の中和は起こらない。

-te.・-me.を名詞修飾節標識(Attributive Clause Marker)と呼ぶ。

1.2.3 -txa・-ma

さきに-txa・-ma を弱化形であるとしたが、どの節標識の弱化形であるかは明らかにしなかった。-txa・-ma の用法には大きく分けて2つあり、それぞれが異なる節標識の弱化によるものと考えられる。

第1の用法は、文末において特定の文修飾素とともに用いられる場合である。この場合には、-txa・-ma は文標識-te_・-me_の弱化形である。

(16)a. amei_ thamin: che'-txa-la: || 母は御飯を炊いたか? ⁸⁾

SM <疑問>

b. amei_ thamin: be^to. che'-ma-le: || 母は御飯をいつ炊くか? ⁹⁾

どれ…の時に SM <疑問>

c. amei_ thamin: che'-txa^kou: || 確かに母は御飯を炊いたよ。

SM <確信>

d. amei_ thamin: che'-txa^te. || 母が御飯を炊いたって。

SM <伝聞>

第2の用法は、特定の特殊補語名詞の前で用いられる場合である。この場合には、-txa・-ma は名詞修飾節標識-te.・-me.の弱化形である。

(17)a. amei_ che'-txa-hmya. cano_ sa:^te_ ||

ACM 限り

母が炊いたのを全部私が食べた。

b. amei_ che'-txa-lau' cano_ sa:^te_ ||

ACM ほど

母が炊いたぶんだけ私が食べた。

c. amei_ che'-txa-lou_ thamin: che'-te_ ||

ACM ように

母が炊くように御飯を炊いた。

1.3 本稿で取り扱う-ta_・-hma_ 節の諸形式

最後に、本稿の対象となる-ta_・-hma_ 節の記述において取り扱われるべき形式としてどのようなものがあるかを示して、この章を終えることにする。

-ta_・-hma_ 節は通常、名詞節として特徴付けられるものである。確かにその用法の中には、名詞節であると考えるのが妥当なものが多くある。しかし、全ての用

法において-ta_・-hma_ 節が名詞節であると考えることには問題があると思われるし、また名詞節であると記述するだけで十分なわけでももちろんない。本稿の例文では、-ta_・-hma_ の逐語訳にNCM(Nominal Clause Marker:名詞節標識)の略号を用いているが、あくまでも便宜的なものであることを断わっておきたい。¹⁰⁾

他の節標識によって導かれる節は、いずれも事象を指示するものであった。しかし、-ta_・-hma_ によって導かれる節には、事象そのものを指示するものの他に、事象に関与する何らかの事物、すなわち、事象参与者(participant)を指示するものがある。

(18)a. amei_ che'-ta_ ^kou_ sa:^chin_ ^te_ || 母が作ったのを食べたい。

NCM DTH 食べる <願望> SM

b. amei_ thamin: che'-ta_ ^kou_ txi.^te_ ||

NCM DTH 知っている SM

母が御飯を作ったのを知っている。

c. amei_ thamin: che'-ta_-ne. amya:ji: sa:^te_ ||

NCM INST たくさん 食べる SM

母が御飯を作ったので、たくさん食べた。

d. amei_ thamin: che'-ta_ sa:-lou. myein.-ye.-la: ||

NCM 食べる SCM 堪能する SM <疑問>

母が御飯を作ったのを、充分堪能しただろうか？

e. amei_ che'-ta_ ^ka. moun.hin:nga: ||

NCM SSB モヒンガー

母が作ってくれたのはモヒンガーだ。

f. amei_ thamin: che'-ta_ || 母が御飯を作ったのだ。

NCM

(18)の中でa.が事象参与者を指示するものであり、それ以外は事象を指示するものである。後者についてはさらに、その現れる環境によって分けてある。b.~e.が非文末位置に生起するもの、f.は文末位置に生起するものである。

a.は自由関係節(free relative)であり、これについては第2章で扱う。b.~d.は補語となる節であり、b.が補文、c., d.が随意的な補語となるものである。これらについては第3章で扱う。e.は擬似分裂文(pseudo-cleft construction)の中で用いられる例である。これについては第4章で扱う。最後に、f.は独立文として用いられる-ta_・-hma_ 節の例であり、これについては第5章で触れる。

2 事象参与者を指示する-ta_・-hma_ 節 — 自由関係節

まず最初に、節内の述語の表す事象の参与者を指示する -ta_・-hma_ 節の用法について観察する。例としては次のようなものがある。

- (19) min: [cai'-ta_] sa:-nain_ ^te_ ||
 あなた 好む NCM 食べる <可<進> SM
 あなたは、好きなものを食べることができる。(大野:224)
- (20) cun_do_ [na: ma- le_ ^ta_]-ta-khu. hyi.^txei:^te_ ||
 私 耳 NEG まわる NCM 1 CL ある まだ SM
 私は、解らないことがもう1つある。(Okell:414)
- (21) [cano_ pyo:-hma_] ^kou_ na: thaun_ ^pa_ - ø - oun: ||
 私 話す NCM DTH 耳 立てる <丁寧> SM<齡> さらに
 私が話すことを聞きなさい。(大野:146)
- (22) cun_do_ [mane' phan_ lou'-ya.-hma_] ^tei_ ^kou_ sin:za:-nei_ ^te_ ||
 私 明日 する <可<進> NCM PL DTH 考える <進行> SM
 私は、明日しなければならないことを考えていた。(Okell:282)

2.1 指示物の意味役割に関する制限

前章の最後に記したように、参与者指示の -ta_・-hma_ 節は自由関係節、あるいは主要部なしの関係節(headless relative) であると考えられる。これら -ta_・-hma_ 節は、どのような参与者を指示することができるのであろうか。

- (23)a. thamin: ce'-te_ || 御飯が炊けた。
 御飯 炊ける SM
- b. [_ ce'-te.] thamin: yu_ ^khe. ^pa_ ||
 ACM 取る <接近> <丁寧>
 炊けた御飯を持って来なさい。
- c. [_ ce'-ta_] yu_ ^khe. ^pa_ ||
 NCM
 炊けたのを持って来なさい。
- (24)a. amei_ thamin: che'-te_ || 母が御飯を炊いた。
 母 御飯 炊く SM
- b. [amei_ _ che'-te.] thamin: yu_ ^khe. ^pa_ ||
 ACM
 母が炊いた御飯を持って来なさい。
- c. [amei_ _ che'-ta_] yu_ ^khe. ^pa_ ||
 NCM
 母が炊いたのを持ってきてなさい。

(23b)(24b)のthamin:「御飯」は、それぞれ(23a)(24a)と同じ述語を持つ関係節内でギャップとなる項に関係付けられている。また(23c)(24c)は(23b)(24b)の関係節つき名詞句と同一の事物を指示し得る参与者指示の-ta_節の例である。

(23c)と(24c)が同一事象に参与する同一事物を指示し得ることに注意されたい。(24a)の述語che'-「煮る」は、(23a)の述語ce'-「煮える」によって表される変化をひき起こすような動作を表す。thamin:は(23a)ではce'-の主語項であり、(23a)ではche'-の非主語項であるが、どちらも主題(theme)(=「煮える」という変化を被るもの)である。¹¹⁾(23c)(24c)の自由関係節は、どちらもそれぞれの述語の主題項となるものを指示する。

ただし、主題の意味役割を担う事物が有生物である場合には、自由関係節を用いることはできない。

(25)a. shaya_ caun:dxɑ:ˆkou_ yai'-te_|| 先生が学生をなぐった。

先生 学生 THM 打つ SM

b. [shaya_ _ yai'-te.] caun:dxɑ: laˆte_||
ACM 来る SM

先生がなぐった学生が来た。

c. *[shaya_ _ yai'-ta_] laˆte_||
NCM

主題以外の参与者についてはどうであろうか。(26b)は場所(locative)の、(27b)は着点(goal)の、(28b)は受領者(recipient)の、(29b)は道具(instrument)の、そして(30b)は動作者(agent)の項が被修飾名詞に関係付けられる例である。

(26)a. di_-mi:bou_jaun_-hma_ amei_ thamin: che'-te_||

この 台所 LOC SM

この台所で母が御飯を炊いた。

b. [_ amei_ thamin: che'-te.] mi:bou_jaun_-hma_|
ACM LOC

母が御飯を炊いた台所で

c. *[_ amei_ thamin: che'-ta_] - hma_|
NCM

(27)a. txu_ yan_goun_-myou.ˆkou_ laˆte_|| 彼はヤンゴンに来了。

彼 ヤンゴン 町 GOAL 来る SM

b. [txu_ _ laˆte.] myou_-hma_| 彼が来た町で
ACM

c. *[txu_ _ laˆta_] - hma_|
NCM

(28)a. shaya_ caun:dxɑ:˘kou_ thamin: cwei:˘te_||

先生 学生 GOAL 御飯 食べさせる SM

先生が学生に食事をおごった。

b. [shaya_ _ thamin: cwei:˘te.] caun:dxɑ: la˘te_||

ACM

先生が食事をおごった学生が来た。

c. *[shaya_ _ thamin: cwei:˘ta_] la˘te_||

NCM

(29)a. di_-khe:dan_-ne. cano_ sa_ yei:˘te_||

この 鉛筆 INST 私 手紙 書く SM

この鉛筆で私は手紙を書いた。

b. [_ cano_ sa_ yei:˘te.] khe:dan_-ne. ma-yei:˘pa_-ne. ||

ACM

INST NEG 書く <丁寧> SM<黠>

私が手紙を書いた鉛筆で書いてはいけません。

c. *[_ cano_ sa_ yei:˘ta_] - ne. ma-yei:˘pa_-ne. ||

NCM

(30)a. amei_ thamin: che'-te_|| 母が御飯を炊いた。

SM

b. [_ thamin: che'-te.] lu_ la˘te_|| 御飯を炊いた人が来た。

ACM 人 来る SM

c. *[_ thamin: che'-ta_] la˘te_||

NCM

いずれの場合にも、c.の自由関係節は、b.の関係節つき名詞句と同一の事物を指示することができない。

結局、これらの-ta_・-hma_ 節は、「述語の表す事象の参加者のうち、主題の役割を担う無生物を指示する自由関係節」とするのが適切である。

-ta_・-hma_ の起源を-te_・-me_と名詞 ha_「もの」の縮約に求める考え方は、この事実によく合致したものであると言える。なぜなら、ha_ が有生物を指示することはないからである。逆の見方をすれば、このような事実は、上に挙げた-ta_・-hma_ の起源を-te_・-me_とha_ の縮約に求める説を支持するものであるということになる。

2.2 節としてのステータス

過去の研究には、V-ta_/V-hma_を「動名詞(verbale noun)」として取り扱ったり(Stewart:1955,pp.64-5)、-ta_・-hma_ を「動詞から動作名詞(action nouns)を

作り出す後倚辞」(Cornyn & Roop:1968,p.162)としたりする分析が見られる。ことに、ここで扱っているようなタイプの-ta_・-hma_ 節は、述語の意味によっては具体的な事物を指示することができるため、派生名詞を中心とする名詞句であるとみなされやすい。にもかかわらず、これらの構造がやはり — 事象参与者指示の場合も含めて — 節として分析すべきものであることは、以下の2つの事実より明らかである。

1つは、主語の役割表示に関する事実である。動詞から作られる派生名詞の意味上の主語は、属格など名詞を修飾するための形式によって表されるのが普通である。しかし、ビルマ語の-ta_・-hma_ 節の主語は、事象参与者指示の場合を含め、通常の-te_・-me_文の場合とまったく同じ仕方で表される。

(31)a. [txu_ che'-ta_] yu_ ^khe.^te_ || 彼が煮たのを取って来た。

彼 煮る NCM 取る <疑> SM

b. *txu_-che'-ta_ yu_ ^khe.^te_ || (txu_- = che'-の主語)

彼の

もう1つは、名詞を修飾する要素との共起不可能性である。一般名詞に先行し、これを限定・修飾する要素としては、指示詞(32a)・疑問形容詞(32b)・所有表現(32c)などがある。

(32)a. di_-hin: yu_ ^khe.^te_ || このおかずを取って来た。

この おかず

b. ba_-hin: yu_ ^khe.^txa-le: || 何のおかずを取って来た？

何の

SM <疑問>

c. txu_-hin: yu_ ^khe.^te_ || 彼のおかずを取って来た。

ところが、事象参与者指示の-ta_・-hma_ 節は、通常これらの名詞修飾要素による修飾を受けない。¹³⁾

(33)a. *di_-che'-ta_ yu_ ^khe.^te_ ||

b. *ba_-che'-ta_ yu_ ^khe.^txa-le: ||

c. *txu_-che'-ta_ yu_ ^khe.^te_ || (txu_- = che'-ta_の所有者)

以上、2つの理由から、-ta_・-hma_ は節の標識であり、名詞派生の接辞ではない。このことは以下の諸章で扱う事象指示の-ta_・-hma_ 節についても同じようにあてはまる。

3 事象を指示する-ta_・-hma_ 節(1) — 補語となるもの

次に、事象を指示する-ta_・-hma_ 節のうち、通常非文末位置に現れるものについて観察することにする。このような-ta_・-hma_ 節の中には、より上位の節の補

語となるものとそうでないものがある。本章で補語となるものを、次章でそれ以外のものを、取り扱う。3.1 で、-ta_・-hma_ 節がどのような事象を表し得るかについて観察し、次いで、3.2 で補文となる-ta_・-hma_ 節を、3.3 で随意的補語として名詞句と同じ役割表示を伴う-ta_・-hma_ 節を、それぞれ扱う。

3.1 -ta_・-hma_ 節の表す事象の種類

3.1.1 単一事象・拡大事象

-te_が現実法の標識であり、-me_が非現実法の標識であること、およびどのような場合に事象が現実あるいは非現実であるかとらえられるかということについては、すでに冒頭で述べた。ただ、冒頭で述べたのは単一事象の場合のみである。ビルマ語における現実・非現実の法は、単一事象だけでなく、単一事象の複数回の生起から構成される拡大事象について言及することもできる。拡大事象の現実・非現実は、それを構成する事象が動態・状態いずれであっても、状態事象の場合に準じて考えることができる。-te_は発話時点以前に拡大事象が現実を開始したことを表し、発話時点でその拡大事象が依然として成立しているかどうかは問わない。-me_は発話時点以前に拡大事象が開始していないことを表す。冒頭で挙げた述語sa:-「食べる」の場合を例に取って、単一・拡大それぞれの解釈を示す。

- (34) txu_ we'txa: sa:^te_|| 彼は豚肉を食べた。(単一事象) /
 彼 豚肉 食べる SM 彼は豚肉を食べる(習慣がある)。(拡大事象)
 txu_ we'txa: sa:-me_|| 彼は豚肉を食べるだろう。(単一事象) /
 彼は豚肉を食べる(習慣がある)だろう。
 (拡大事象)

-ta_・-hma_ 節もそれぞれ現実法・非現実法の標識を持つ節であるから、当然-te_・-me_文によって表されるような事象を表すことができる。

3.1.2 事象類を表す-ta_節

-ta_節には、単一事象・拡大事象を表す以外に、事象の類を表す場合がある。

- (35) cano_ [tayou'hin: che'-sa:^ta_] ma-cai'-phu: ||
 私 中華料理 煮る 食べる NCM NEG 好む SM
 私は中華料理を作って食べるのが好きではない。
- (36) shaya_-ha_ [caun:dxɑ:^tou. sa_ cou:za:^ta_] ^kou_ gayu. sai'^te_||
 先生 TOP 学生 PL 勉強 努力する NCM DTH 注意する SM
 先生は学生たちががんばって勉強することに注意を払っている。
- (37) cano_ txu_-ne. [sa_ou' we_ ^ta_] ^kou_ shwei:nwei:^te_||
 私 彼 COM 本 買う NCM DTH 相談する SM

私は彼と本を買うことを相談した。

例えば(35)の-ta_節は、中華料理を作って食べたという1回きりの行為を表すのも、中華料理を作ったという習慣を表すものでもなく、個々の事例を捨象したより一般的な意味での「中華料理を作って食べる」という行為の種類を表すものである。(36)(37)も同様である。

同一の-ta_節が、具体的な事象を表すとも、事象類を表すとも解釈され得る場合があったとしても、不思議ではない。

(38) [shei'kan:-hma_ ei'-ya.-ta_] ma-lwe_`phu: ||

波止場 LOC 眠る <不寝> NCM NEG 易しい SM (Cornyn:105)

(38)は-ta_節の解釈に関して3通りの読みを許す。それぞれの解釈は、適当な副詞的要素を補ってやることで明確になる。

(39)a. [manei.nya. shei'kan:-hma_ ei'-ya.-ta_] ma-lwe_`phu: ||

昨晚

ゆうべ波止場で眠らなければならなかったのは大変だった。(単一事象)

b. [da`pa'-ta-chein_ shei'kan:-hma_ ei'-ya.^ta_] ma-lwe_`phu: ||

1 週 1 度

週に1度波止場で眠らなければならないのは大変だ。(拡大事象)

c. [badxu_ ma-shou_ shei'kan:-hma_ ei'-ya.^ta_] ma-lwe_`phu: ||

誰 NEG 言う

誰でも、波止場で眠らなければならないのは大変だ。(事象類)

3.1.3 想定された事象を表す-hma_ 節

-hma_ 節には、頭の中で想定された事象を表す場合がある。

(40)a. txu_ [mane'phan_ maun_maun_-ne. ale_ txwa:-hma_] pyo_`te_ ||

彼 明日 (人名) COM 遊び 行く NCM 楽しむ SM

彼は明日マウンマウンと遊びに行くので、楽しい。

b. txu_ [mane'phan_ maun_maun_-ne. ale_ txwa:-hma_] pyo_-me_ ||

彼は明日マウンマウンと遊びに行くので、楽しいだろう／

明日マウンマウンと遊びに行ったら、彼は楽しいだろう。

(41)a. [myan_ma_pi_-hma_ myan_ma_sa_ txwa:-txin_-hma_] kaun:^te_ ||

ミャンマー LOC ビルマ語 行く 学ぶ NCM 良い SM

ミャンマーへビルマ語を学びに行くのは良いことだ。

b. [myan_ma_pi_-hma_ myan_ma_sa_ txwa:-txin_-hma_] kaun:-me_ ||

ミャンマーへビルマ語を学びに行くのは良いことだろう／

ミャンマーへビルマ語を学びに行ったら、良いだろう。

(40b)(41b)はそれぞれ、-hma_ 節が、実現が予定されているような具体的な事象を表す解釈と、ただ単に話者の頭の中で想定された事象を表す解釈の2通りを許す。後者の解釈は、主文の標識が-me_である場合にのみ起こり、この場合-hma_ 節は、従属節標識-yin_ によって導かれる条件節とほぼ同じ働きをする。

(42) txu_ [mane'phan_ maun_maun_-ne. ale_ txwa:-yin_] pyo_-me_||
SCM<仮定>

明日マウンマウンと遊びに行ったら、彼は楽しいだろう。

(43) [myan_ma_pi_-hma_ myan_ma_sa_ txwa:-txin_-yin_] kaun:-me_||
ミャンマーヘビルマ語を学びに行ったら、良いだろう。

また、意図・約束を表す述語の取る-hma_ 節も、頭の中で想定された事象を表すものの一種であると言える。これらの述語は-hma_ 節のみを取り、-ta_節を取らない。そしてこれらの述語の取る-hma_ 節は、主文の主語がこれから実現させようと思っている事象を表す。

(44)a. txu_ [japan_sa_ txin_-hma_] ^kou_ sei' win_za:^te_||
彼 日本語 学ぶ NCM DTH 関心がある SM
彼は日本語を学ぶことに関心がある。

(45)a. txu_ cano.^kou_ [pai'shan_ myan_myant_ pyan_sha'-hma_]
彼 私 GOAL お金 早く 返済する NCM
gadi. pyu.^te_||
約束 する SM 彼は私にお金を早く返すことを約束した。

この場合には、主文の標識は-te_であってもかまわない。

3.2 述語の種類と-ta_・-hma_ 補文の真偽解釈

-ta_・-hma_ 補文を取る述語の中には、これらの補文を主語として取るものと、主語以外の項として取るものの2種類がある。非主語の補文としては-ta_・-hma_ 節の他に-te_・-me_節が可能であり、述語によってはこの両方を取ることができ、補文の種類の選択によって意味が異なる場合もある。¹⁴⁾ 一方、主語の補文となれるのは-ta_・-hma_ 節だけで、-te_・-me_節は許されない。

述語の種類によって、補文の意味解釈、とりわけ補文の表す内容の真偽についての解釈がさまざまに異なる。以下では、真偽解釈のしかたによって述語をいくつかに分類し、記述する。

3.2.1 叙実的述語

まず最初に、補文の内容がつねに真であると解釈される述語から見て行こう。認識・感情および性状判断の述語がこの類に含まれる。

認識を表す述語には、txi.-「知る・知っている」、na: le_-・dxabo: pau'-「理解する」、yei' mi.-「気付く」などがある。いずれも、-ta_-・-hma_ 節・-te_-me_ 節の両方を取ることができる。

- (46)a. [aphei_ ci.-nei^ta_] ^kou_ txu^tou. txi.^te_ ||
 父 見る いる NCM DTH 彼 PL 知っている SM
 b. [aphei_ ci.-nei^te_] -lou. txu^tou. txi.^te_ ||
 SM QUT

父が見ていたことを、彼らは知っている。

- (47)a. txu_ [cano_ pyan-ya.-hma_] ^kou_ na: le^te_ ||
 彼 私 帰る <帰る> NCM DTH 理解する SM
 b. txu_ [cano_ pyan-ya.-me_] -lou. na: le^te_ ||

彼は私が帰らなければならないことを理解した。

-ta_-・-hma_ 節・-te_-・-me_ 節のいずれの場合も、補文の意味内容は話者によって真であるとみなされる。主文を否定にしても、補文の内容が真であることには変わりがない。

- (48) [aphei_ ci.-nei^ta_] ^kou_ txu^tou. ma-txi.^phu: ||
 父が見ていたことを、彼らは知らない。（「父が見ていた」は真。）

- (49) txu_ [cano_ pyan-ya.-hma_] ^kou_ na: ma-le^phu: ||
 彼 私 帰る <帰る> NCM DTH 理解する-NEG SM
 彼は私が帰らなければならないことを理解しなかった。

（「私が帰らなければならない」は真。）

感情を表す述語は通常-ta_-・-hma_ 節のみを取り、-te_-・-me_ 節は取らない。

- (50) txu_ [sa_mei:bwe: aun^ta_] ^kou_ cei_na'-te_ ||
 彼 試験 合格する NCM DTH 満足する SM
 彼は試験に合格したことに満足した。

- (51) cano_ [mane'phan_ hou-lu_-ne. twei.-hma_] ^kou_
 私 明日 その人 COM 会う NCM DTH
 txei' wun: txa^te_ ||

非常に 喜ぶ SM 私は明日その人に会うことを非常に喜んでいる。

これらの述語の補文の内容も、主文の肯定・否定にかかわらず真であるとみなされる。

- (52) txu_ [sa_mei:bwe: aun^ta_] ^kou_ ma-cei_na'-phu: ||
 彼は試験に合格したことに満足しなかった。
 （「（彼が）試験に合格した」は真。）

- (53) cano_ [mane'phan_ hou-lu_-ne. twei.-hma_] ^kou_

txei' wun: ma-txa_`phu: ||

私は明日その人に会うことをそんなに喜んでいない。

(「(私が)明日その人に会う」は真。)

性状判断の述語は-ta_節を主語として取るが、この主語節の内容も真であるとなされる。

(54) [mane' pain: txwa:-ya.^ta_] kaun:^te_ ||

午前 行く <囃> NCM 良い SM

午前中に行けたのは良いことだ。(Cornyn:116)

(55) [za'txama:^tei_-ne. atu_du_ thamin: sa:^ta_] mya:^te_ ||

俳優 PL COM 一緒に 御飯 食べる NCM 多い SM

俳優たちと一緒に食事をしたことが多かった／

俳優たちと一緒に食事をする人が多い。(Okell:450)

(56) [dou.^kou_ to:dxu_tau:dxu_-lou. kho_`ca.^ta_] hma:^te_ ||

私達 DTH 田舎者 QUT 呼ぶ <囃> NCM 語っている SM

我々を田舎者と呼んだのは／呼ぶのは、間違っている。(大野:145)

これらの述語はいずれも、補文の内容が真であることを前提とした上で、それについての話者の判断 — 主文の主語がその事柄を知っている、その事柄に対して満足する、その事柄は良い、など — を述べるものであり、Kiparsky-Kiparsky(1970)の叙実的述語(factive predicate)に含まれるものである。

ただし、-ta_・-hma_ 節の内容が真実であると前提されるのは、具体的な単一事象ないしは拡大事象を表す場合に限られる。3.1.2 の事象類を表す-ta_節と、3.1.3 の想定された事象を表す-hma_ 節の場合には、その内容は前提されない。このことは、これらの補文を取り得る述語のすべてについてあてはまる。

これまで、「補文の表す内容が真実である」という表現を何度か用いてきた。ここで、どのような場合に「補文の表す内容が真実である」と言えるのかについて考えてみたい。-ta_補文の表す内容が真実であると話者がみなすことができるのは、その内容が現実に生起したという確かな情報を話者が持っている場合であると言えるだろう。同様に、-hma_ 補文の表す内容が真実であると話者がみなすことができるのは、その内容がこれから生起するという確かな情報を話者が持っている場合であると言える。¹⁵⁾

よく考えてみると、-ta_補文と-hma_ 補文とで「確かな情報」の意味が若干異なることがわかる。話者が-ta_補文の表す内容について100%確かな情報を持つことはあり得る。例えば、話者が直接-ta_補文によって表される事象を体験するような場合がそうである。しかし、-hma_ 補文の表す内容はまだ起っていないものであるから、話者がそれについて100%確かな情報を持つことはあり得ない。-hma_ 補文の表

す内容が結局は起らなかったという事態は、充分あり得ることなのである。つまり、
-hma_ 補文の前提はキャンセルされる場合があるということである。

(57) tanei.ga. cano_ maun_maun_-ne. twei.^te. akha_

一昨日 私 (人名) COM 会う ACM 時

txu_ manei.nya. maun_ba. la_-hma_ ^kou_ txi.^te_ ||

彼 昨晚 (人名) 来る NCM DTH 知っている SM

tage:^to. manei.nya. maun.ba. ma-la_ ^phu: ||

実際 は NEG SM

一昨日私がマウンマウンと会った時、彼は昨晚マウン・バが来るということを知っていた。でも実際は、昨晚マウン・バは来なかった。

3.2.2 叙実性について無指定の述語

-ta_・-hma_ 節と-te_・-me_節の両方とともに用いられる述語のあるものは、
-ta_・-hma_ 節の場合だけ補文の内容が真実であると前提され、-te_・-me_節の場合には補文の内容の真偽が問題にされない。

(58)a. amei_-ha_ [maun_maun_ wun_ji: phyi'-ta_] ^kou_ youn_ ^te_ ||

母親 TOP (人名) 大臣 なる NCM DTH 信じる SM

母親はマウンマウンが大臣になったことを信じている。

b. amei_-ha_ [maun_maun_ wun_ji: phyi'-te_] -lou. youn_ ^te_ ||

SM QUT

母親はマウンマウンが大臣になったと信じている。

(58b) では、「マウンマウンが大臣になった」という命題内容は、主文の主語によって主張されるのみであり、その内容の真偽については特定できない。しかし(58a)では、同じ命題内容が主文の主語によって主張されると同時に、話者によって真実であると前提される。(58a,b)を否定にした(59a,b)では、主文の主語による命題「マウンマウンが大臣になった」の主張は行われなくなる。しかし(59a)では、その命題が真実であるという話者の前提は変わらない。

(59)a. amei_-ha_ [maun_maun_ wun_ji: phyi'-ta_] ^kou_ ma-youn_ ^phu: ||

NEG SM

母親はマウンマウンが大臣になったことを信じない。

b. amei_-ha_ [maun_maun_ wun_ji: phyi'-te_] -lou. ma-youn_ ^phu: ||

母親はマウンマウンが大臣になったと信じない。

Kiparsky-Kiparsky(1970)に見るように、英語の場合、補文の叙実性は述語によって決定されるものであった。ビルマ語の場合、述語によってはその補文の叙実性に関して無指定であり、補文の形式自体によって補文の叙実性が部分的に決定され

ることがある。

他の述語の例をいくつか挙げる。

- (60)a. txu_ [do_la_-ngwei_-tan_bou: ca_-hma_] ^kou_ sin:za:-nei ^te_ ||
彼 ドル お金 価値 落ちる NCM DTH 考える いる SM
彼はドルの価値が下がることを考えている。

- b. txu_ [do_la_-ngwei_-tan_bou: ca_-me_] -lou. sin:za:-nei ^te_ ||
SM QUT
彼はドルの価値が下がると考えている。

- (61)a. [cano_ ma-hyi.^ta_] ^kou_ pyo:-ø ||
私 NEG いる NCM DTH 話す SM<鈴> 私がいなことを言え。
b. [cano_ ma-hyi.^phu:] -lou. pyo:-ø || 私はいないと言え。(大野:77)

- (62)a. cano_ [abi.dan_-atxi' thou'-hma_] ^kou_ txu_-shi ^ka. ca:^te_ ||
私 辞書 新しい 出す NCM DTH 彼 ところ SRC 聞く SM
私は新しい辞書が出ることを彼から聞いた。

- b. cano_ [abi.dan_-atxi' thou'-me_] -lou. txu_-shi ^ka. ca:^te_ ||
私は新しい辞書が出ると彼から聞いた。

3.2.3 含意述語

これまでの例では、-ta_・-hma_ 補文は、具体的な単一事象や拡大事象を表す限り、つねにその意味内容が真であることが前提されるものであった。しかし、事象を指示する-ta_・-hma_ 補文の意味内容がつねに前提されとは限らない。

-ta_・-hma_ 補文の意味内容が真であるという前提を持たない述語の1つは、ci-「見る(動作)」、myin-「見る(状態)」、hmyo-「眺める」、ngei:-「ぼんやり眺める」など、視覚を表す述語である。これらの述語は-ta_・-hma_ 節だけを取り、-te_・-me_ 節は取らない。

- (63) [min: ngou ^ta_] ^kou_ cun_do_ ma-ci.-ye' -phu: ||
あなた 泣く NCM DTH 私 NEG 見る <平気> SM

あなたが泣くのを、私は見ていられない。(大野:248)

- (64) [na'you'-twei_ myi'-the: pin.-txwa:-nei ^ta_] myin ^khe.-ye.-la: ||
精霊の像 PL 川 中 運ぶ 行く <進行> NCM 見る <過去> SM <疑問>

精霊の像を川へ運び込んで行くのを見てきたか?(Okell:415)

これらの述語が肯定文で用いられる場合には、補文の内容が真であるということが含意される。ゆえに、(65)は矛盾を生じる。

- (65) *cano_ [maun_maun_ japan_pyi ^ka. thwe' khwa ^ta_] myin_-ya.^te_ ||
私 (人名) 日本 SRC 出発する NCM 見る <可能> SM

da^pei_me. txu japan_pyi^ka. ma-thwe'khwa^phu: ||

しかし 彼 NEG SM

私はマウンマウンが日本を発つのを見た。しかし彼は日本を発たなかった。
否定文で用いられる場合には補文の内容の真偽についての含意を持たない。ゆえに
(66a,b) はどちらも矛盾を生じない。

(66)a. maun_maun japan_pyi^ka. thwe'khwa^te_ || da^pei_me. cano_

[txu japan_pyi^ka. thwe'khwa^ta_] ma-myin_-ya.^phu: ||

NEG SM

マウンマウンは日本を発った。しかし、私は彼が日本を発つを見なかった。

b. cano_ [maun_maun japan_pyi^ka. thwe'khwa^ta_]

ma-myin_-ya.^phu: || txu japan_pyi^ka. ma-thwe'khwa_lou.^pa_ ||

NEG SM SCM<理由> <丁寧>

私はマウンマウンが日本を発つを見なかった。彼が日本を発たなかったからだ。

もう1つはhou'-「そうである」、hyi.-「ある」などである。これらの述語は
主語節を取り、主文が肯定の場合には、主語節の内容が真であることが含意される。

(67) [txwa:-yin: la_-yin: ci.-tha: myin_-tha:^ta_] hyi.^te_ ||

行く SCM 来る SCM 視る <保持> 見る <保持> NCM ある SM

行ったり来たりしながら、見ておくということがあった。(Mauntxaya:45)

(68) [ngayou'txi:^tain: sa'-ta_] hou'-te_ ||

唐辛子 ごと 辛い NCM そうである SM

唐辛子がみんな辛いというのは本当だ。

否定の場合には、主語節の内容が偽であるという含意が生じる。

(69) [txwa:-yin: la_-yin: ci.-tha: myin_-tha:^ta_] ma-hyi.^phu: ||

行ったり来たりしながら、見ておくということがなかった。

(70) [ngayou'txi:^tain: sa'-ta_] ma-hou'-phu: ||

唐辛子がみんな辛いのではない。(Mauntxaya:4)

この2つの種類の述語はいずれも、主文が肯定か否定かによって補文の真偽の解釈が影響を受けるという性質を持っている。このような性質は、Karuttnen(1971)が含意動詞(implicative verb)と名付けた一群の述語に見られる特徴である。

3.2.4 非含意述語

最後に、-ta_・-hma_ 節の内容の真偽についての含意を全く持たないような述語の種類を見てみよう。

1つはtxan_dxaya. phyi'-「疑う」、nyin:-「否定する・否認する」などの述語

である。

- (71) cano_ [txu_ pai'shan_ khou:ˆta_]ˆkou_ txan_dxaya. phyi'-te_||
私 彼 お金 盗む NCM DTH 疑い 生じる SM
私は彼がお金を盗んだということに疑いを持った。

- (72) cano_ [maun_ba. ma-la_ˆkhe.ˆta_]ˆkou_ nyin:ˆte_||
私 (人名) NEG 来る <疑> NCM DTH 否定する SM
私はマウン・バが来なかったことを否定した。

これらの述語の -ta_・-hma_ 節は、肯定文の場合においてさえ、その内容の真偽が含まれない。

- (73)a. cano_ [txu_ pai'shan_ khou:ˆta_]ˆkou_ txan_dxaya. phyi'-te_||
da_ˆpei_me. nau'-hma_ txu_ dage_ khou:ˆta_ˆkou_ txi.ˆte_||
しかし 後 LOC 彼 実際に 盗む NCM DTH 知っている SM
私は彼がお金を盗んだということに疑いを持った。しかし後で彼が実際に盗んだことを知った。

- b. cano_ [txu_ pai'shan_ khou:ˆta_]ˆkou_ txan_dxaya. phyi'-te_||
dage_ˆto. txu_ ma-khou:ˆphu:||
本当 は 彼 NEG 盗む SM
私は彼がお金を盗んだということに疑いを持った。実際には彼は盗まなかった。

- (74)a. cano_ [maun_ba. la_ˆkhe.ˆta_]ˆkou_ nyin:ˆte_||
dage_ˆto. txu_ la_ˆkhe.ˆta_ˆkou_ txi.ˆte_||
本当 は 彼 来る <疑> NCM DTH 知っている SM
私はマウン・バが来たことを否定した。本当は、彼が来たことを知っていたのだが。

- b. cano_ [maun_ba. la_ˆkhe.ˆta_]ˆkou_ nyin:ˆte_||
dage_ txu_ ma-la_ˆkhe.ˆta_ˆkou_ txi.-lou.ˆpa_||
実際に 彼 NEG 来る <疑> NCM DTH 知っている SCM<理由> <丁寧>
私はマウン・バが来たことを否定した。実際に彼が来なかったのを知っていたからだ。

これらの述語のもう1つの特徴として、-ta_・-hma_ 節と-te_・-me_節の両方を取り、しかも-ta_・-hma_ 節と-te_・-me_節の場合で意味が正反対になるということがある。

- (75) cano_ [txu_ pai'shan_ khou:ˆte_]ˆlou. txan_dxaya. phyi'-te_||
私は彼がお金を盗んだという疑いを持った。

- (76) cano_ [maun_ba. ma-la_ˆkhe.ˆphu:]ˆlou. nyin:ˆte_||

私はマウン・バが来なかったと否定した。

(71)では主文の主語「私」が「彼がお金を盗んでいない」と思っているのに対し、(75)では「彼がお金を盗んだ」と思っている。また、(72)では「私」が「マウン・バが来た」という意味のことを語っているのに対し、(76)では「マウン・バが来なかった」という意味のことを語っている。

これらの述語は、内在的に否定の意味を持っている。そして、否定辞の場合と同じように、これらの述語についても否定のスコープを考えることができる。そして、-ta_・-hma_ 節と-te_・-me_ 節は、否定のスコープの点から見たふりが異なる。-ta_・-hma_ 節が述語の否定のスコープに含まれるのに対し、-te_・-me_ 節は否定のスコープに含まれない。

もう1つは、3.1.3 でみた予定・約束を表す述語である。これらが取る-hma_ 節は主文の主語の頭の中で想定される事象を表すものであり、この種の-hma_ 節がつねにそうであるように、主文が肯定であれ否定であれ、補文の内容の真偽についてなんらの含意も生じない。

(77)a. txu_ [japan_sa_ txin_-hma_] ^kou_ sei' win_za: ^te_ ||

彼 日本語 学ぶ NCM DTH 関心がある SM

彼は日本語を学ぶことに関心がある。

b. txu_ [japan_sa_ txin_-hma_] ^kou_ sei' ma-win_za: ^phu: ||

彼は日本語を学ぶことに関心がない。

(いずれの場合にも、「彼が日本語を学ぶこと」の真偽については何も含意されない。)

(78)a. txu_ cano.^kou_ [pai'shan_ myan_myan_ pyan_sha'-hma_]

彼 私 GOAL お金 早く 返済する NCM

gadi. pyu.^te_ ||

約束 する SM 彼は私にお金を早く返すことを約束した。

b. txu_ cano.^kou_ [pai'shan_ myan_myan_ pyan_sha'-hma_]

gadi. ma-pyu.^phu: || 彼は私にお金を早く返すことを約束しなかった。

(いずれの場合にも、「彼が私にお金を早く返すこと」の真偽については何も含意されない。)

Karuttnenの用語によれば、これらは非含意動詞(non-implicative verb)ということになる。

3.3 随意的補語となる-ta_節

次に、補文でない-ta_節について見ることにしよう。これらの節には、役割表示を伴うものと、そうでないものがある。

3.3.1 原因・理由を表す-ta_・-hma_ 節

役割表示を伴う随意的な-ta_節の例としては、理由を表す-ne./-mou./-caun. を伴うものがある。これら役割表示のうち、-ne.は-ta_節とのみ結びつき、-hma_ 節とは結びつかない。

- (79) [sin:za:-lou. ma-ya.^ta_]-ne. shaya.-shi_ txwa.^te_||
 考える SCM NEG 得る NCM INST 先生の ところ 行く SM
 考えることができなかったの、先生のところへ行った。(Okell:367)
- (80) [pai'shan_ ma-lau'-ta_]-ne. ma-we.^khe.-ya.^phu: ||
 お金 NEG 足りる NCM INST NEG 買う <擬> <可逆> SM
 お金が足りなかったの、買ってはこれなかった。(大野:181)
- (81) [man_dalei:^kou_ pyaun:-ya.-hma_]-mou. mei'shwei.^tei_
 マンダレー GOAL 移る <可逆> NCM ため 友人 PL
 la_ hnou' she'-ta.^pa_ ||
 来る 挨拶する NCM <準>
 マンダレーへ引っ越さなければならないから、友人たちが挨拶しに来たのだ。
 (大野:205)

- (82) [mo:-nei.^ta_]^caun. amo: phyei_-lai'-te_ ||
 疲れる <持続> SM …ゆえ 疲れ 解く <決断> SM
 疲れていたの、疲れをいやした。(大野:182)

これらの原因・理由節の意味内容も、話者によって真であることが前提されている。主文が肯定であっても否定であっても、原因・理由節の内容が真であることに変わりはない。

- (83)a. [shi_ mya:^ta_]-ne. di_-hin: cai'-te_ ||
 油 多い NCM INST この 料理 好む SM
 油っこいので、この料理が好きだ。
- b. [shi_ mya:^ta_]-ne. di_-hin: ma-cai'-phu: ||
 NEG SM

油っこいので、この料理が好きじゃない。

(83b) において、-ta_節は否定のスコープの中に含まれない。実際のところ、これらの原因・理由節は否定のスコープの中に入ることができない。この点で、同じく理由を表す-lou. 節と異なる。

- (84)a. shi_ mya:-lou. di_-hin: ma-cai'-phu: ||
 油 多い SCM この 料理 NEG 好む SM
 油っこいから、この料理は好きじゃない。

b. shi_ mya:-lou. di_-hin: cai'-ta_ ma-hou'-phu: ||

NCM NEG そうである SM

油っこいからこの料理が好きなのではない。

c. [shi_ mya:ˆta_]-ne. di_-hin: ma-cai'-phu: ||

NCM INST

油っこいので、この料理は好きじゃない。

d. *[shi_ mya:ˆta_]-ne. di_-hin: cai'-ta_ ma-hou'-phu: ||

下線部は否定のスコープを表す。(84a,c) の-lou. 節が動詞に前節される否定辞のスコープに含まれないのに対し、(84b) の-lou. 節は否定表現ma-hou'-phu:「そうでない」のスコープに含まれている。(84d) の-ta_節は(84b) の-lou. 節と同様、否定のスコープに含まれると考えられる。もし含まれないなら、(84c) と同じように適格になるはずだからである。そうすると、(84d) が不適格なのは、-ta_節が否定のスコープに入ることができないからということになる。¹⁶⁾

3.3.2 状況説明の-ta_節

役割表示を伴わない随意的な-ta_節の例としては、次のようなものがある。

(85) [hlel_ hma_-tha:ˆta_] ma-la_ˆtxei:-lou. |

舟 予約する <購> NCM NEG 来る まだ SCM

舟を予約しておいたのが、まだ来ないので… (Okell:416)

(86) [mye'hna_ ci_-ya.ˆta_] te_- ma-txa_ˆpagala: ||

顔 見る <嚙> NCM 非常に NEG 快い …ではないか

顔を見れば、あまり顔色がさえていないじゃない。(大野:97)

(87) [pyo:ˆsaya_ hyi.ˆta_] pyo:ˆpa_ ||

話す …べきこと ある NCM <丁寧>

言うべきことがあれば言いなさい。(大野:78)

Okell(1969:p.416) には、(85)の[]の部分の名詞句であり、次の文中の関係節つきの名詞句の現れることが期待されるような環境に現れるという主旨の記述がある。

(88) [hma_-tha:ˆte.] hlel_ ma-la_ˆtxei:-lou. |

予約する <購> ACM 舟 NEG 来る まだ SCM

予約しておいた舟が、まだ来ないので… (Okell:416)

もしそうであるとすると、(85)の[]は単一の節とは考えられなくなる。全体が名詞句となるためには、[]内の構造は次のいずれかであると考えられる。

イ. 後置された関係節を伴う名詞句。¹⁷⁾

Ⅱ. 名詞句と自由関係節が同格に置かれたもの。

しかし、そのいずれの構造を採っても、次のような場合を説明することができない。

(89) [hlei_`kou_ hma_-tha:ˆta_] ma-la_ˆtxei:-lou. | cf.(85)

主語でない主題の項につく差異化標識-kou_ の存在によって、名詞 hlei_「舟」は動詞hma_-「予約する」の項であるとししか考えられない。そうすると、[]内が節であることを認めざるを得なくなる。しかし、[]内を自由関係節であると考えすることはできない。自由関係節は述語の表す事象において主題を表す無生物を指示するが、その場合、節内の主題を表す項に当たる部分は必ずギャップとならなければならないからである。よって、この文の構造としては、次のようなものを仮定するのが妥当であろう。

(90) [hlei_`kou_ hma_-tha:ˆta_] (hlei_) ma-la_ˆtxei:-lou.

この形式から、2番目のhlei_を省略したものが(85)である。¹⁸⁾

このような考え方は、ビルマ語においてはさほど奇妙なものではない。ビルマ語では、同一文中でない場合でさえ、先行する文脈に現れた表現（特に名詞句表現）は、表現に曖昧性を生じない限り、頻繁に省略される。まして同一文中である場合には、そのような省略はほとんど義務的であると言ってよいのである。(86)(87)についても同様に考えることができる。

(91) [mye'hna_ ci.-ya.ˆta_] (mye'hna_) te_-ma-txa_ˆpagala:

(92) [pyo:ˆsaya_ hyi.ˆta_] (pyo:ˆsaya_) pyo:ˆpa_

では、これらの-ta_節は、文中でどんな役割を果たしているのだろうか。(86)(87)で、-ta_節の内容から後続する節の内容が自然に予想される、すなわち-ta_節と後続する節が順接の関係にあるのに対し、(85)においては、-ta_節の内容から後続する節の内容が自然に予想されるものではない、言い替えれば-ta_節と後続する節が逆接の関係にある。しかし、-ta_節自体はいかなる役割表示も伴っていないし、単一の形式が順接・逆接という正反対の関係に立ち得ることから考えると、これらの関係を表すのが-ta_節の機能であるとは考えにくい。

これらの-ta_節に共通しているのは、その内容が後続する節の内容に密接な関連を持っているということ、そしてその意味内容が話者によって真であると前提されているということである。

(93)a. [hlei_`kou_ hma_-tha:ˆta_] la_ˆpi_ ||

舟 DTH 予約する <儲> NCM 来る SM

舟を予約しておいたのが、来た。

b. [hlei_`kou_ hma_-tha:ˆta_] ma-la_ˆphu: ||

舟を予約しておいたのが、来ない；来なかった。

いわばこれらの-ta_節は、後続する節の表す事象の背後にある状況を説明するとい

う機能を持つと言える。そして、後続する節との順接や逆接の関係は、含意(implicature)によって生じるものであると考えられる。

3.4 まとめ

本章で扱った-ta_・-hma_ 節の真偽解釈について、具体的な単一事象・拡大事象を表すものに限ってまとめると、次のようになる。

-ta_・-hma_ 節の真偽解釈

叙実的述語の補文(3.2.1)	主文の肯定・否定にかかわらず真である。
叙実性無指定述語の補文(3.2.2)	主文の肯定・否定にかかわらず真である。
含意述語の補文(3.2.3)	主文が肯定の場合のみ真である。
非含意述語の補文(3.2.4)	真偽について含意を持たない。

(内在的に否定の意味を持つもの)

原因・理由節(3.3.1)	主文の肯定・否定にかかわらず真である。
状況説明節(3.3.2)	主文の肯定・否定にかかわらず真である。

補文の意味解釈が、それを要求する述語の意味的性質の影響を受けることがあり得るのに対し、補文でない随意的な節の場合にはそのようなことはないと考えられる。そうすると、原因・理由節や状況説明節の場合のように「主文の肯定・否定にかかわらず真であると前提される」というのが、-ta_・-hma_ 節が述語の意味的性質の影響を被らない場合に与えられる無標の解釈であると考えることができる。叙実性に関して無指定の述語の場合には、述語の意味の中に真偽解釈に関する指定がないわけだから、補文でない場合と同じく無標の解釈が与えられる。叙実的述語の場合には、述語の意味的性質の中に「補文の内容が真であると前提される」という要素が含まれるため、それによって補文の真偽解釈が決定される。含意述語や、内在的に否定の意味を持つ非含意述語の場合にも、それぞれの述語の影響によって-ta_・-hma_ 節の真偽解釈が決定される。

4 事象を指示する-ta_・-hma_ 節(2) — 擬似分裂文の前提節

本章では、補語とならない-ta_・-hma_ 節の例として、次のようなものについて考える。

(94) [aphei_ txau'-chin_ ^ta_] ko_phi_ ^pa_ ||

父 飲む <願望> NCM コーヒー <丁寧>

父が飲みたがっているのは、コーヒーだ。

(95) su.zu.baun: [ya_ ^ta_] ^ka. kou: ^ca' ||

合計すると 得る NCM SSB 9 チャット

合計すると得たのは9チャットだ。(Mauntxaya:51)

(96) [ganei.nya. shou-hma_] ba-txachin:-mya:^palein. ||

今晚 歌う NCM 何の 歌 一体 … だろう

今晚歌うのは、一体何の歌だろう？(Okell:378)

(94)の文を発する話者は、[]部の内容、つまり「父が何かを飲みたがっている」ことが真であるということを前提していなければならない。このことは、(94)をma-hou'-phu:の項として埋め込むことによってできる否定表現においても変わらない。

(97) [[aphei_ txau'-chin^ta_] ko_phi_] ma-hou'-phu: ||

父 飲む <願望> NCM コーヒー NEG そうである SM<否定>

父が飲みたがっているのは、コーヒーではない。

3章で見た-ta_・-hma_節の場合と異なるのは、[]部の意味内容の中に特定されない要素が含まれているという点である。いわば、ここでの前提は一種の変項(variable)を含み、その変項の値を特定することを要求するものである。そして、前提に含まれる変項の値、すなわち焦点(focus)は、[]部に後続する要素によって特定される。

つまり、(94)は、以下に示すような談話的な構造を持つ、いわゆる擬似分裂文(pseudo-cleft sentence)である。

(98) [aphei_ txau'-chin^ta_] ko_phi_(^pa_)

前提 焦点

「父がXを飲みたがっている」「X=コーヒー」

擬似分裂文は、文末位置に節標識を伴う述語を持たないという点で、1.1 でみたビルマ語の通常の節の構造に当てはまらないものである。同じように通常の節の構造に当てはまらない文のタイプとして、等位文(equational sentence)がある。ビルマ語の等位文は2つの名詞的要素の並置によって形成され、繫辞的な要素を持たない。¹⁹⁾ 否定表現は全体をma-hou'-phu:の項とすることによって形成される。

(99) cano_-le: caun:dxa_^pa_ || 私も学生です。

私 <並列> 学生 <丁寧>

(100) txu^ka. dxaji:-la: || 彼が村長か？

彼 SSB 村長 <疑問>

(101) hou_-lu_ badxu_-le: || あの人は誰か？

あの 人 だれ <疑問>

(102) [cama.-aphei_ caun:shaya_] ma-hou'-phu: ||

私の(女性語) 父 教師 NEG そうである SM

私の父は、教師ではない。

(94)~(96)の文の[]部を第2章で見た自由関係節であると考えれば、これらの

文の構造は(99)～(102)と同じであることになる。しかし、擬似分裂文の全ての場合をこのように考えることは出来ない。次の例を見てほしい。

(103) [daga: la_-phwin.-pei:ˆta_]ˆka. ein_pho_mein:mange_||

扉 来る 開ける <開> NCM SSB お手伝いさん

扉を開けに来てくれたのは、お手伝いさんだ。(Mauntxaya:47)

(104) [txwa:ˆta_]ˆka.ˆto. cano_ˆtou.-hna-yau'-pa_ˆpe:||

行く NCM <此> 私 PL 2 …人 <主> <動>

行ったのは、私たち2人です。(大野:145)

これらの擬似分裂文で焦点となるのは動作者である。第2章で見たように、自由関係節は通常、主題となる無生物のみを指示し得るから、これらの文が等位文の構造を持つと考えられるためには、等位文の構造においてのみ自由関係節が動作者を指示してもよいという例外を認めなければならない。しかし、かりにそれを認めたとしても、処理できない例が存在する。

(105) [txwa:-hma_] ka:-ne.-la:| mi:yatha:-ne.-la:||

行く NCM 車 INST <開> 汽車 INST <開>

行くのは自動車でか、汽車でか?

(106) [yaun:-ya.ˆta_]ˆka. lan:ma.dan:-hma_||

売る <可> NCM SSB 大通りの道端 LOC

売らなければならなかったのは、大通りの道端でだ。(Mauntxaya:67)

(107) [txu_-ne. cano_ twei.ˆta_] manei.ga. you'hyin_youn_-hma_ˆpa_||

彼 と 私 会う NCM 昨日 映画館 LOC <主>

彼と私が会ったのは、昨日映画館です。

(108) [di_-lou_ mei:-ya.ˆta_] tacha:ˆcaun. ma-hou'-pa_ˆphu:||

このように 問う <可> NCM 他の事 …ゆえ NEG そうである <主> SM

このように訊いたのは、他の理由のためではない。(Cornyn:96)

(109) [khu. txei_-ya.-ta_]ˆka. ka: tai'-lou.||

今 死ぬ <可> NCM SSB 車 ぶつかる SCM

今死んだのは、自動車事故にあったからだ。(Mauntxaya:57)

これらの例を等位文と解釈するということは、自由関係節が、標識付きの名詞句や従属節標識を含む従属節といったさまざまな要素と等価なものであると認めることを意味するが、それはかなり無理のある考え方である。中でも(107)では、時間と場所の2つの付加的補語が焦点となっており、等位文としての解釈と根本的に相容れない構造となっている。

以上の観察から、少なくとも無生物の主題が焦点となる場合を除いて、擬似分裂文が自由関係節を含む等位文であるとみなすことには困難がある。そうではなくて、

これらの擬似分裂文は、通常の動詞文からその補語を後置することによって焦点化したものと考えたい。つまり、上記(103)(106)(109)の各文は、それぞれ(110)(111)(112)に示すような操作を経て出来上がったものである。

(110) *ein_pho_mein:mange_ daga: la_-phwin.-pei:^te_*
 → [*_____ daga: la_-phwin.-pei:^ta_*] ^ka.
ein_pho_mein:mange_

(111) *lan:ma.dan:-hma_ yaun:-ya.^te_*
 → [*_____ yaun:-ya.^ta_*] ^ka. *lan:ma.dan:-hma_*

(112) *ka: tai'-'lou. khu. txei_-ya.^te_*
 → [*_____ khu. txei_-ya.-ta_*] ^ka. *ka: tai'-'lou.*

先にも述べたように、擬似分裂文における前提は、その内部に変項を含み、その値の特定を要求すると言う点で、補文や随意的な節における前提と異なる。しかし、どちらの場合にも、その意味内容を話者が真であるとみなすという点には変りがない。これら2種類の前提がともに *-ta_*・*-hma_* 節という単一の形式で表されるのも、あながち理由のないことではない。

事象を指示する *-ta_*・*-hma_* 節には、もう1つの共通点がある。補文となる *-ta_*・*-hma_* 節では、真であることが前提される補文の内容に対して、述語がなんらかの判断を述べる。随意的な節の場合にも、原因・理由節にしろ、状況説明節にせよ、その節の内容に関して、主文の述語による陳述がなされる。そして、擬似分裂文の前提節の場合には、その内部に含まれる変項の値が、後続する要素によって与えられる。つまり、*-ta_*・*-hma_* 節は、単にその内容が真であるとみなされる節ではなく、その内容に対して、後続する要素が何事かを述べるような節である。ということとは、通常、*-ta_*・*-hma_* 節の位置では叙述が完結しないということを意味する。文標識 *-te_*・*-me_* と比べると、このことがはっきりする。

(113)a. *mi:yatha:-ne. txwa:^te_ ||* 汽車で行った。
 b. *txwa:^ta_ mi:yatha:-ne. ||* 行ったのは、汽車でだ。
 c. *txwa:^te_ || mi:yatha:-ne. ||* 行った。汽車で。

(113b)の *txwa:^ta_* と *mi:yatha:-ne.* の関係は「前提と焦点」というものであるが、(113c)の *txwa:^te_* と *mi:yatha:-ne.* の関係は「陳述とそれを補足する情報」というものに過ぎない。後者では *txwa:^te_* の後に文境界があるが、前者ではそれが無い。

5 事象を指示する *-ta_*・*-hma_* 節(3) — *-ta_*・*-hma_* 文

最後に、独立文として用いられる *-ta_*・*-hma_* 節について観察する。以下これを

-ta_・-hma_ 文と呼ぶことにする。

(114) kou_so:win:^ka. di_-hma_ se'kare'tei_ri_ lou'-nei^ta_||
(人名) SSB ここ LOC 秘書 する <断> NCM

コウ・ソーウィンはここで秘書をしているんだ。(Cornyn:118)

このような-ta_・-hma_ 文についてはこれまで、-te_・-me_で終わる文の文体的な変異であり、特に強調または断定の語調を表すという主旨の記述が数多くなされてきた。(Minn Latt:1962-64, Cornyn & Roop:1968, Okell:1969, Richter:1983, 大野:1983 など) 確かに、(114) と次の(115) とは、その表す命題内容も、現実法を用いている点も、全く同じである。

(115) kou_so:win:^ka. di_-hma_ se'kare'tei_ri_ lou'-nei^te_||
SM

コウ・ソーウィンはここで秘書をしている。

(114) の文を、ただ単に事象を表す-ta_・-hma_ 節が独立して用いられたものであると記述するだけでは不十分であることは明かである。また、過去の諸家のように、強調や断定というだけでも十分ではない。特に「強調」という術語は他の様々な助辞に対しても適用され、甚だ漠然とした印象をぬぐい去ることができない。さらに詳しい用法の研究が必要であろう。-te_・-me_文との差異が微妙なものであることもあって、目下のところこの用法に対して明確な特徴付けも説明も与えることはできない。ここでは、さしあたり問題となると思われる点について二・三記すにとどめる。

5.1 文修飾素との共起

まず、比較的目的につく事実として、-te_・-me_文(弱化形式-txa_・-ma_ の場合を含む)と-ta_・-hma_ 文の間に見られる、文修飾素との共起可能性の違いが挙げられる。文修飾素を様々な文タイプとの共起可能性の点から分類すると、おおよそ次の3つに分けられる。

①通常-ta_・-hma_ 文とのみ共起するもの:-po_<断定>、-phe_<強調>など。

(116) di_-lau'-to. na: le_-hma_-po_||

このくらい <比> 耳 回る NCM <断定>

このくらいは解るよ!(大野:208)

(117) e:di_-hma_ to_do_ nwei:-hma_ ^phe_||

そこ LOC かなり 暖かい NCM <強調>

そこは、かなり暖かいだろうよ!(Okell:356)

②-txa_・-ma_ 文・-ta_・-hma_ 文の両方と共起するもの:-kou_<確信>、-la:/-le:/-toun_<疑問>など。

(118)a. khin_bya: in_matan_ do:dxā. ci:ˆta_ˆkou: ||

あなた 非常に 怒り 大きい NCM <確信>

あなたはとても怒っているね。(大野:212)

b. khin_bya: in_matan_ do:dxā. ci:ˆtxa_ˆkou: ||

(119)a. khin_bya:ˆtou.-aphei: pei:ˆta_-la: ||

あなた PL 父 与える NCM <疑問>

あなたがたの父親がくれたのか?(大野:68)

b. khin_bya:ˆtou.-aphei: pei:ˆtxa_-la: ||

(120)a. be_ˆto. txwa:-hma_-le: ||

どれ …の時に 行く NCM <疑問>

いつ行くのか?(Okell:444)

b. be_ˆto. txwa:-ma_-le: ||

③-te_・-me_文・-ta_・-hma_ 文の両方と共起するもの:-pa_ <丁寧>。この文修飾素は、-ta_・-hma_ には後続するが-te_・-me_には先行するという点で、特異である。

(121)a. tain_-ne. gaun:-ne. tai'-mi.ˆta_ˆpa_ || (大野:173)

柱 と 頭 と ぶつかる <不注意> NCM <丁寧>

と頭とをぶつけてしまったのです。

b. tain_-ne. gaun:-ne. tai'-mi.ˆpa_ˆte_ ||

SM

①については、これらの文修飾素が-ta_・-hma_ 文を要求すると記述すればよい。しかし、②③については、(114)と(115)の違いに対応する2種類の形式があることになる。よって、-te_・-me_文と-ta_・-hma_ 文との機能的な違いがわからない限り、これら文修飾素を伴った形式の記述も行い得ない。

5.2 -ta_・-hma_ 文の談話中での機能

-te_・-me_文と-ta_・-hma_ 文との機能的な違いを見るためには、どうしても談話中でのこれら2種類の用法を調べる必要がある。これまでにわかっているところでは、談話中での-ta_・-hma_ 文の機能として、次のようなものがある。

①先行する文の内容の理由

(122) lan:ˆkhalei:-atain: — e:di_-hyei.na:-hma_ lan:ˆka.-le:

hyou'-te_ — khalei:ˆtei_ˆka. txei'-pi:ˆto. gaza:ˆta_ˆphe: —

khalei: txei'-mya:ˆte_ || txadi. tha: maun:ˆpa_ ||

この小道にそって — 真前の道も混んでいる — 子供たちがよく遊ぶんだ —
子供がひどく多い。気を付けて運転してくれ。(Cornyn:114)

②先行する文の内容の帰結

(123) ke: — cun_do_`tou. phana'-to. chu'-ya.-lein.-me_
mi'sata_-jou:n: ||

phana' chu' shou_`to. di_-phana'-ci:~kou_ kain_`pi:
te'-txwa:-ya.-hma_-la: ||

さあ — 僕は履物は脱がなければならないだろうよ、ジョーンズ君。

履物を脱ぐというと、この履物を手で持って上って行かなければならないの
かい? (Cornyn:110)

(124) da_-ne. hou_din: txan_dwe:-ne. yan_goun_`kou_ — hou_din:
be.hna-ye'-lau' ca_`pa_-le:-bya_ ||

txan_dwe:~ka. txin:bo:~ka. hou_`ka. nya. thwe'-pa_`te_
thwe'-pi:~to. lan:-hma_ ta-nya. ei' — yan_goun_`kou_ mane'
she.ta-na_yi_ she.hna-na_yi_-lau' shou_-yin_ yau'-ta_-phe: ||

それで、その、タンドウェーからヤンゴンへは — その、何日ぐらいかかっ
たんだい?

タンドウェーからの船は、そこから晩に出航した 出航してから、途中
で一晩寝て — ヤンゴンに午前11時か12時ぐらいに着いたんだ。(Cornyn:105)

③先行する文に対する解説

(125) o_ — nou. di_-yei_ than:~te. lu_`tei_~ka.~ko: ||

o_ — yei_ than:~te. lu_`tei_-la: || yei_ than:~te.
lu_`tei_~ka. — tage_-lou. phaya: phu:~te. lu_`tei_~ka. —
phaya:~kou_ txa'pe_`chin_-lou. hyi.-yin_ txu_`tou.~ka. yei_
laun:-pei:~ta_~phe: || (Cornyn:113)

ほう — それなら、この水を運ぶ人たちは（どういう人たちか）?

ああ — 水を運ぶ人たちかい? 水を運ぶ人たちは — 正しくは、バゴダを拜
む人たちは — バゴダを清めたかったら、彼らが水をかけてやるんだよ。

しかし、大部分の例については未だその談話中における機能を明確にすることが
できないまま残る。

ただ、次のようなことは考えられる。第3・4章でみた-ta_・-hma_ 節は、その
内容に対して、後に続く要素が何事かを述べるようなものであった。ここでみた
-ta_・-hma_ 文でもそのことは基本的に変わず、ただそれに後続するはずの要素
が既に先行文脈に現れるものと同じ内容を持つために、省略されるような場合が考
えられるのではないか。少なくとも、上に挙げた①の場合は、それによってある程
度説明されるように思われる。

いずれにせよ、-ta_・-hma_ 文の機能については、不明の点がたくさんある。

-te_・-me_の場合との対比も含めて、今後さらに検討が必要であろう。

おわりに

本稿では、様々な環境に現れる-ta_・-hma_ 節の用法・機能について観察し、多くの場合に、-ta_・-hma_ 節の内容が話者によって前提されることを示した。前提という概念を厳密に定義しないまま用いてきたきらいがあるが、-ta_・-hma_ の機能を考える際に、この概念が重要な役割を果たしていることは、ほぼ疑いない。

ビルマ語の法の意味をどのように特徴付けるかということは、依然重要な問題として残っている。補文やその他の従属節との組合せの中で、法の対立を示す節標識が担う意味をどのように解釈するかについて、包括的な研究が必要であろう。

談話的な機能の研究も、今後なされなければならない研究領域の1つである。単独で用いられる-ta_・-hma_ 文の談話的機能の研究が不十分であることは既に述べたが、擬似分裂文に関しても同様な検討が必要である。特に、-ta_・-hma_ 文と文修飾素相互の関連、擬似分裂文と談話的情報を与える補語修飾素との関連については、注意を払う必要がある。擬似分裂文に関しては、いずれ稿を改めて、さらに詳しく検討したい。

また、動詞shou_-を含む-ta_・-hma_ 節についても論じるいとまがなかった。動詞shou_-「いう」の用法は、他の動詞に比してもかなり特殊な面を多く備えているが、-ta_・-hma_ 節の意味解釈の特異性もその中の1つに数えられる。これについては、動詞shou_-の他の用法と併せて論じるのが適切であろうと思う。

※本稿は、京都大学大学院文学研究科博士後期課程1年次研究報告として提出したものに加筆・修正を加えたものである。

本稿の執筆にあたり、Dr.Kaung Nyun, U Aung Win Naing, Ma Aye Tint Hlaing の諸氏にインフォーマントとして協力していただいた。この場を借りて厚く御礼を申し上げたい。

<注>

1) (3a)で挙げたビルマ語の文標識は、陳述を表すものの一部である。ビルマ語の文標識にはこの他に、命令・禁止など、陳述でない発話を表すものがある。それらも含めて、口語ビルマ語の文標識の主要なものをまとめると、以下のようになる。

要求的		非要求的				
肯定	否定	肯定			(否定中和)	
		現実法(a)	(b)	(c)	即時法	非現実法
- ϕ	-ne.	-te_	-ye.	-yo:	-pi_	-me_
						(-phu:)

非要求的・肯定・現実法の3つの形式(a),(b),(c)は、それぞれ異なる話法上のニュアンスを表す。もっとも中立的なものが(a)である。

また、非要求的・肯定・即時法の文標識-pi_は、知覚・認識した事象内容の即時的な発出を表す。

2) 現代ビルマ語では、人称代名詞及びそれに準ずる表現が、所有表現として名詞を修飾する場合や、格標識を伴う場合、その最終音節が第3声調(creaky tone)に変わる。

ex. txu_「彼」、txu.-sa_ou'「彼の本」、txu.^kou_「彼を、に」/
shaya_「先生」、shaya.-sa_ou'「先生の本」、shaya.^kou_
「先生を、に」

標識-te.・-me.の持つ第3声調も、これに準じた働きをしているとみることができよう。

3) これについては過去の研究のほとんどが言及している。

4) 動詞には、単一の動詞形態素からなるもの、複数の動詞形態素の複合によってできたもの、名詞+動詞のイディオムなどがある。さらに、これらの動詞が複数個連続して1つの述語のようにふるまうこともある。

5) 否定接頭辞ma-は、つねに動詞要素に前接される。名詞+動詞イディオムの場合には、名詞要素と動詞要素の間に割って入る形になる、また、動詞連続の場合には、最後の動詞に前接される。

6) 主語を表す格標識は- ϕ である。

7) asa:など特別の意味役割を表示する語を特殊補語名詞であるとみなす根拠は、まさに-te.・-me.節による修飾を受けるという点にある。

8,9) -la:は疑問詞なしの疑問文と共に、-le:は疑問詞を含む疑問文と共に、用いられる。

10) 名詞節標識としては-ta_・-hma_の他に-phou.がある。これはもともと名詞aphou.「分け前・取り分」に由来する特殊補語名詞が他の要素と複合を起こし、初頭のa-が落ちた形式であるが、動詞句の主要部となる述語につくときには、文中に現れる人間の参加者や話者によってその生起が期待されるような事象を表す名詞節を形成する。-phou.節は補文としても、随意的な従属節としても用いられる。またそれ自体が第3声調を持つことから、そのまま名詞修飾節としても用いられる。

-phou.の表す法的意味の位置付けについては、さらに検討が必要である。

11) ここでいう主題(theme)の概念は、Gruber(1976), Jackendoff(1972)などの用いているものに従った。プラーグ学派機能文法などで用いる、題述(rheme)に対立する概念ではないことに注意されたい。

13) ちなみに、動詞に接頭辞a-を付加することによって派生された名詞の場合には、これら修飾要素による修飾が可能である。ache' 「煮物」を例に取る。

a. di_-ache' yu_`khe.^te_|| この煮物を取って来た。

この煮物 取る <擬> SM

b. ba_-ache' yu_`khe.^txa-le:|| 何の煮物を取って来た？

何の

c. txu_-ache' yu_`khe.^te_|| 彼が煮た煮物を取ってきた。

彼の

ただ、c.の場合に、txu.はもとの動詞「煮る」の動作者と解釈され、派生名詞「煮物」の所有者としては解釈されにくいようである。

14) 主語でない-ta_・-hma_ 補文には、随意的に差異化標識-kou_ を付加することができる。一方、-te_・-me_補文には通常、引用標識-lou_ が付加される。thin_「思う」・yu_sha_-「みなす」など一部の述語の-te_・-me_補文は、述語の直前にある場合に限り、引用標識を伴わない。しかし、補文と述語の間に他の要素が介在する場合には、引用標識が必要となる。

15) 叙実性の問題を扱った研究の中で、叙実的述語が未来の事柄を表す補文をとる例に出くわすことがないのはどういうわけだろうか。英語のI know that he'll come tomorrow.にしても、日本語の「私は彼が明日来ることを知っている」にしても普通の文であり、補文が過去や現在の事柄を表す場合と、解釈の点でそう大きな違いがあるとも思えない。それなのに未来の場合を取上げないのは、片手落ちのように思える。

16) 否定のスコープに入ることができないという-ta_節の特徴は、随意的補語の場合のみに限られる。項として用いられる-ta_・-hma_ 節は、つねに否定のスコープに含まれるからである。

a. [di_-hin: shi_ mya:^ta_]`kou_ ma-txi.^phu:||

この料理 油 多い NCM DTH NEG 知っている SM<否定>

この料理が油っこいことを知らなかった。

b. [di_-hin: shi_ mya:^ta_]`kou_ txi.^ta_ ma-hou'-phu:||

この料理が油っこいことを知っていたのではない。

17) 古い文語では、-txo: によって導かれる名詞修飾節が被修飾名詞に後続する場合があるようである。

18) -ta_の後ろに名詞要素の複数性を表す助辞-tei_ を伴う次の文は、一見この解釈に反する例であるかのように見える。

[hlei_ hma_-tha:ˆta_]ˆtei_ ma-la_ˆtxei:ˆphu: ||

舟 予約する <保留> NCM PL NEG 来る まだ SM

しかし、この文の解釈は「(複数の人が)舟を予約しておいたのが、まだ来ない。」となる。ここで複数表示の-tei_ が表すのは、むしろ事象そのものが個々の人に対して起こったという、事例の複数性であると思われる。次の例が適格であることが、それを裏付ける。

[hlei_ˆkou_ hma_-tha:ˆta_]ˆtei_ ma-la_ˆtxei:ˆphu: ||

19) 文語やあらたまった口語では、等位文や擬似分裂文の末尾にphyi'-te_ 「…である」が現れる。しかし、この述語phyi'-は通常の「生じる・…になる」の意味で用いられる場合と異なり、なんら実質的な意味を持たない。ゆえに、「全ての文は文末に述語を持たなければならない」という規範によってその存在を要請されたダミーの述語であると思われる。この場合でも、否定の形式はma-hou'-phu:であり、ma-phyi'-phu: ではない。

<表記>

☆子音	閉鎖音		破擦音		摩擦音		鼻音		側面音		弾音		半母音	
	有 声	無 声	無 声	有 声	無 声	無 声	有 声	無 声	有 声	無 声			有 声	無 声
		無 氣	無 氣		無 氣	無 氣		無 氣						
唇音	b-	p-	ph-			(f-)	m-	hm-					w-	(hw-)
歯音	dx-	tx-												
歯茎音	d-	t-	th-			z-	s-	sh-	n-	hn-	l-	hl-	(r-)	
硬口蓋音				j-	c-	ch-	hy-	ny-	hny-				y-	
軟口蓋音	g-	k-	kh-					ng-	hng-					
喉音						h-								

★単純母音

	前 舌	後 舌
高母音	-i	-u
中高母音	-ei	-ou
中母音	-a(唇)	
中低母音	-e -o	
低母音	-a(1-4#)	-ai -au

☆二重母音

(-nおよび-'の前のみ)

☆声調

第1声	V22	a_
第2声	V44	a:
第3声	V41	a.
第4声	V?44 (単純母音)	a'
	V?41 (二重母音)	
軽声	固有の調値を持たない 母音はつねに[ə]	a

★音節末要素

- n 前の母音を鼻音化する要素
- ' 声門閉鎖音 第4声調を特徴付ける

★語境界

- ^ 後の子音に有声化が起こる
- 後の子音に有声化が起こらない

<略号>

本稿の例文中に用いられた略号を以下に示す。

ACM	名詞修飾節標識	PL	複数表示の助辞
CL	数量詞	QUT	引用標識
COM	随伴者の補語を表す格標識	SCM	従属節標識
DTH	主語でない主題の補語に付加される差異化標識	SM	文標識
GOAL	目標点の補語を表す格標識	SRC	起点の補語を表す格標識
INST	道具の補語を表す格標識	SSB	主語に付加される取り立ての標識
LOC	場所の補語を表す格標識	SUBJ	主語を表す格標識
NCM	名詞節標識	TOP	話題化標識
NEG	否定辞		

<資料>

- (Okell) : Okell(1969)
- (大野) : 大野(1983)
- (Cornyn) : Cornyn(1957), Section 2 (pp.91-126)
- (Mauntxaya): maun_txa_ya. : ngayou' hman_hlyin_ sa'ya.lein.mi_

<参考文献>

- Comrie, B. (1981) Language Universals and Linguistic Typology, Syntax and Morphology. Basil Blackwell, Oxford.
- Cornyn, W. S. (1957) Burmese Chrestomathy. American Council of Learned Societies, Program in Oriental Languages, publ. ser.A., texts, 4. Washington, D.C.
- Cornyn, W. S. & D.H. Roop (1968) Beginning Burmese. New Haven, Yale University Press.
- Gruber, J. S. (1976) Lexical Structures in Syntax and Semantics. Amsterdam, North-Holland Publishing Company.

- Jackendoff, R. S. (1972) Semantic Interpretation in Generative Grammar. MIT Press.
- Josephs, L. S. (1976) "Complementation", Masayoshi Shibatani (ed.) Japanese Generative Grammar (Syntax and Semantics 5), 307-369.
- Karuttnen (1971) "Implicative verbs", Language 47, 340-358.
- Kiparsky, P. & C. Kiparsky (1970) "Fact", Bierwisch-Heidolph(eds.) Progress in linguistics. The Hague, Mouton, 143-173.
- Matisoff, J. A. (1972) "Lahu Nominalization, Relativezation, and Genitivization", Syntax and Semantics 1, 237-257.
- Minn Latt (1962) "First report on studies in Burmese grammar", Archiv Orientalní 30, 49-115.
- _____ (1963) "Second report on studies in Burmese grammar", Archiv Orientalní 31, 230-273.
- _____ (1964) "Third report on studies in Burmese grammar", Archiv Orientalní 32, 265-292.
- Okell, J. (1969) A Reference Grammar of Colloquial Burmese. London, Oxford University Press.
- Richter, E. & Maung Than Zaw (1983) Deutsch-burmesisches Gesprächsbuch. Leipzig, Enzyklopädie.
- Stewart, J. A. (1955) Manual of Colloquial Burmese. London, Luzac.

- 稲田俊明 (1989) 『補文の構造 (新英文法選書・3)』. 東京, 大修館書店.
- 大野 徹 (1983) 『現代ビルマ語入門』. 東京, 泰流社.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』. 東京, 大修館書店.
- 澤田 英夫 (1988) 「現代ビルマ語における動詞配列の類型について」, 言語学研究 7, 73-110.
- 田野村忠温 (1986) 「命題指定の「の」の用法と機能 - 諸説の検討 -」, 言語学研究 5, 85-120.
- 福地 肇 (1985) 『談話の構造 (新英文法選書・10)』. 東京, 大修館書店.
- 毛利 可信 (1980) 『英語の語用論』. 東京, 大修館書店.
- 藪 司郎 (1975) 「ビルマ語の述部の構造覚え書き」アジア・アフリカ文法研究 4・述語: 41-52. 東京, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

(さわだ ひでお, 博士後期課程)